

昨日は、上のKさん一家や、向いのクリーニング屋Nさんと一緒に朝早くからボーリングに出かけ、遊びの後は駅前のマルイ屋上公園で時間をつぶした。他の家族と自分の妻子が睦みあう光景の中に居ると、家族から剥がれ落ち、醜悪な自分を衆目に晒しているような気分になってくる。

Kさんは三つになる一人息子のマアちゃんにとってもやさしい。マアちゃんもKさんなしでは夜も日も明けぬ懐きようだ。奥さんの話しだと手を上げたことなどないそうである。ぼくはtの小さな体が歪むほど手を振るってしまうことがある。父親失格以前の問題だと頭では分かっている。子供が生まれたら嫌でも父親になり、やがてかわいくてしかたなくなるといふ一般の言われ方は、ぼくの現状から遠い。性格的な破損かもしれない。

tはぼくを別に嫌いではない様子だが…。

今日も仕事を終えてKさんと階段を登ってきて家のドアを開けたら、何やらわけの分からないことを口走りながら出てきた。あわてた仕種でマアちゃんのおさがりのゾウリを履き、ぼくにはなくKさんに握手を求め、足に纏わりついた。ぼくは「おとうちゃんはこっちだよ。もうごはん食べさせないよ」などと苦笑し、少しばかり虚ろになり、片隅に吹き寄せられる。他の家族と接触した昨日の夕方から急におしゃべりになり、時々聞き取れる言葉をまじえながらしゃべり狂っていた。だんだんtがぼくの中心に居座り続け、もう一人のぼくになり、大きくなってくることに不安な痛みを覚える。娘のyは、時々ふくらし粉の入りすぎた饅頭のように泣くことを除けばまだあまり苦にならない。二人一緒に泣きわめくと、頭の蝶番はずれ、ぼくの中のかすかな父親が逃げ出していく。

しかし、Yの「子供二人育てるってやはり大変ね」という言葉には無性に反感を覚えるのだ。

三つの夢を見た。四つであったか、いや、一夜の夢を分割的に感じているのは、あいまいな言葉に包囲されて疲れきった意識の断裂なのだ。夢の迷路を抜けて苦しい息で帰って来た時今の今までさまよっていた世界の信号を引き付けようと暗い部屋でもがいていた。愚行をあざ笑うかのように夢はみるみる色褪せ萎んでいった。

今日は半年ごとの棚卸しの日に当たっている。1日中Kさんと原料や消耗品の数を調べて回った。力仕事ではないのにひどく疲れた。仕事場で無駄口をたたかぬよう気を遣っているのだが、単調な作業中は特に、MさんとYさんの女性陣、Kさんとぼくの男性陣で交わすとりとめのない話しいつ引き込まれてしまう。時には進んで話題を持ち出す。仕事に追われて気が立っている時以外にも、ささいな会話からお互い気持ちがつれ合って、気

まずい雰囲気が生まれてしまうこともしばしばある。

Kさんは柔和な人当たりの良い人だが、時折会話や仕事に憑かれたように一人で突っ走ってしまい、どうしてよいか分からなくなる。ぼくも妙な断言を工場内でやってしまい、他の人を尻目に舞い上がってしまうことが最近よくある。自信を持って言えることなど何も無いのに、隠したい嫌な性格が散発する。

この職場に勤めて五ヶ月目に入った。Yの母親がここの社長夫人と従姉妹で、娘夫婦の危なっかしい生活を気遣って紹介してくれたのである。保釈中であることを相手が知った上で雇われているのは結構気が重いものだ。「知られているのだから」と割り切れないところがある。月に二度ばかり休暇をもらわねばならないことも、隠しているのとは負い目の質が異なる。工場の上階にあるアパートを借り、通勤の苦勞もなく、月々のものも正確にもらえるという安定とは裏腹な動揺に日々さいなまれている。子供が二人になり、今までのように行き当たりばったりで職場を変えることが難しい状態のぼくにとって、けっして悪い条件ではないのだが…。

中国の湖南省で二百年前の女性（五十歳前後）の遺体がほとんど原形のまま発見されたという話しが新聞に出ていた。大写しの写真は薄気味悪いように見えた。開いた口は何かを叫んでいるようであり、綿々と連なる歴史の概念を哄笑するかのようでもあった。

8 / 2

アルゼンチンから輸入したクローバ<sup>20</sup>ミリの蜂蜜が約10トン、ドラム缶にして34本入荷した。突然だったので、仕事の予定を狂わされたKさんは少々機嫌が悪かった。ぼくもそんな彼に合わせて憤りを演じてしまっている。肉体労働に従事することは嫌ではないのだが、少しわだかまりがある。他人に対して無意識に「この仕事はぼくにとって本命ではないのだ」というポーズを取りたがっていることに気が付く。そんな自分を許容するという以上に、固執しようとする作爲もある。「没頭できる仕事など今の職業的世界には存在しない」と言うのも現状にとって傲慢な言い方でしかない。見えるものは素直に見、見えないものを見ようとする努力を怠るまいと思うのだが、否応もなく見えてしまうものがぼくの現在を規定するに過ぎないのだろう。

怠惰を鍛えることはできない。しかし、怠惰にさえ形を与えてしまう。

高裁からYM君の提出した即時抗告申立書に対する決定が送達されてきた。予想通り、抗告の棄却と、鬼塚裁判長の忌避申立却下の正当性を、形式論理で取り繕ったものであった。この即時抗告申立書提出に至るいきさつは、ぼくたち統一被告団二グループの不整合性、解体現象を明確に示したと言える。とりわけ、この間お互いの共通項を示しながら接近してきたぼくとYM君の間にも、深い亀裂と、共同不可能の部分が横たわっていることを思い知らされることになった。それは、以前から自己の意見を白日のもとにさらしつつ

公判闘争に関わる姿勢を課しているY M君と、意見や生活感情を混合させたままアモルフに日和見的な姿勢を払拭し切れないでいるぼくとの、明確な対比を強いたと言える。

ぼくは、表面的には穏やかな討論の中で、彼が極論者・夢想的観念論者であるかのよう  
にグループの共同性（不整合性の中にある暗黙の安堵感に食い入って存在しようとする擬  
制の共同性）から押しつけられようとしていた時、彼を明確な論理をもって擁護すること  
もできず、感情的な言動をもって自らの孤立をはつきりさせ、彼と本質的な意見の交換を  
開示することもできなかった。そう、ぼくはあの時、いちごっこの意見の対立には早  
くかたをつけてもらって（どちらかに妥協してもらって）家へ帰ったのだ。なぜそ  
うであったのか、自分の根拠を掘りつくさねばならない凄まじい負い目をその時点で背負  
ったと言える。ぼくは、印鑑作成のためと称するみともない四百円カンパをY M君に手  
渡した。四百円によってY M君の信義を泥足で踏みつけたのだ。彼の悲しげな表情はぼく  
への抗議をいささかも含んではいなかった。それだけにこの事実の醜さは深い。

今度の日曜日、彼の家を訪問する予定だが、今までとは違うぼくに対する彼ではないか  
と思えてなかなか連絡する勇気が湧かない。

ドラム缶の引き取り作業は午後九時近くまでかかった。激しい労働の後に一瞬の空白が  
訪れるけれども汗に匹敵する喜びはない。暗く淀んでいる不明確な夢をまさぐりながら妻  
や子の中に入ると、不機嫌な心と身勝手な愛の谷間にかかる危うい吊り橋に、夕べがほ  
かに色を落としているだけだ。

8 / 4

要するにボーリングに行きたかったのだ。なぜ一人では行けないのか分からない。仕事  
を終え、汗を流して食卓につくまでは頑固な思いではなかった。ビールを飲み、外で花火  
をやっているらしい気配を感じ、窓から顔を出してKさん達の姿を見止めた時、ボーリ  
ングにYと行きたいという欲求が止めようもなく浮かび上がってきたのである。Yはにべも  
なくぼくの散財を拒否した。それは当然である。ぼくはつい一週間ほど前三千円近くも飲  
み屋に入れ込んでいたからだ。今月は彼女の姉の出産もあり、八丈島で世話になった人達  
にお中元も贈らねばならない。ぎりぎりの生活を切り盛りしているYにしてみれば、ボー  
リングなどに使う金の余裕があるはずもなかった。しかし、ぼくは、ぼくへの拒否と失望  
を露わにお勝手の方に立つ彼女の後姿を見ながら、急激に硬直していく自分をどうするこ  
ともできなかった。窓の外の黒い鉄格子に肩をもたせかけ、これを超える自分の幻影  
を何度も反芻した。割れた頭蓋の隙間から漏れ出てゆくのは赤いものだけではない。空ろ  
な無機物となったのけぞった自身の体を見下ろしている視線を思った。Yは、ぼくがけっ  
して踏み越えないであろう一線をあたかも深く察知しているかのように、自信ありげに振  
舞うようになっていく。その一線に背中を向けた内側で、反発と八つ当たりを繰り返して  
いる。しかも、密着して閉ざされた家族関係にとって、一種の柔軟体操のような現象を帯

びている。そう彼女も意識することをぼくは許すことができない。甘えは他者への残忍さに変貌するのだろうか。

今日、ぼくは右手中指に傷をつくっていた。三百キロのドラム缶を転がしている時、コロとして使っていた鉄パイプの間に軍手ごと巻き込まれ肉をつぶしたのである。白けきった経営者の態度に不快をかみ殺しながら作業を続けていた矢先、不覚にもつまらぬ失敗を招いてしまった。工場のMさんたちに手当てをもらいながら、ふと、これで当分みんなとボーリングに行けないなど考えた。その後に魔がさしたのだ。

傾斜したぼくの心はYの拒絶に執拗に食いさがった。「君の呪いのせいで中指をけがしちゃった、おめでどう」。悪気はないつもりだったが、陰湿でしつこかった。Yは憤然と一万円札を封筒から抜き出し、「これをつかってくればいい」とぼくに投げつけた。「けがさせてまであなたを止めようと考えたことはない。暴言は心底許せない」と言った。

彼女がtを連れてぼくを避けるように買物に行ってしまった後、冷蔵庫を開けてビールを引き出し、ケチャップをなめながら暗い部屋でそれを飲んだ。反撃されたことへの腹立たしさというより、対象の不明な怒りが全身に渦巻いた。「家を出よう、もう二度と妻子の前に姿を見せまい」。しかし、浮かぶ先から意識は歯がゆく萎えていくのだ。

彼女が帰って来た時、眠ったふりをしてみた。惨めな滑稽さだ。飯を不機嫌に食いながら黙りこくっているYの顔を見ることができない。いや見ない。おかずはサヤエンドウの味噌あえ、冷やっこ、鯖煮、味噌汁には大根の千切りが入っている。食いながら対象を見失った怒りが奔騰した。Yか、自分か、こういう空間か、人間のあり方そのものか、そんな大袈裟なことではない、目眩がした。…ぼくはこんな姿でない自分も知っている…。気が付くと飯茶碗が遠くへ飛んでいた。唸り声のようなものが喉を押し開いた。何かを飛び越したのを感じた。電話機の玩具を踏み潰し、盆を膝で叩き割った。ファンシーケースの上段から金の入った封筒をつかみ出し、一万円札を抜き取ると封筒を畳に叩きつけた。指の傷から血が滴った。押入れを開け、ちり紙をつかんで傷に当てた。ズキズキと物言うように痛んだ。痛みに呼応するような細い細い開放感が油汗と共にすべり落ちた。

Yの怯えた顔が、差し上げられた飯茶碗の向こうに沈んでいた。ぼくの指を遠くから見るようにして「手当てしようか」と震える声で言った。

ぼくは何処へ行けばよかったのだろう。「何処へ行こうか」歩きながらそればかり考えていた。意外にも行くあてが全く無いのだ。飲んだくれて安い旅館に泊まるか、それとも公園のベンチで寝るか、誰かぼくに引っかけかかる女はいないか、一人で居るのは嫌だ。ウロウロしたあげくパチンコ店に入った。銀色の鉄球を弾きながら、この一万円札を使い切ることも、遠くへ行ってしまうこともできないであろう自分をもやもやと感じていた。

ムラ気が立っている。苛々して止めようがない。妻子への八つ当たりは辛い。それを小賢しく正当化しようとする姿勢は醜いし、さもない。理由がはっきりしないから一時的に

反省してもすぐに形が崩れてしまう。

先週の日曜日、YM君の家へ遊びに行った。少々気疲れもしたが、大人に成長した息子と両親の温かい家族的な雰囲気、入間川、花火や出店、Yも子供も久しぶりに楽しげでぼくも嬉しかった。しかし、その後は、またささくれ立った毎日が続いた。先日も一日中何かに腹を立てて過ごした。パチンコで千円もすった。何もやる気がしない。

今日、YM君よりハガキが来た。被告団への統一的な文面と見え、「今度の日曜日、裁判闘争について討論したいから渋谷駅に結集」との趣旨が記されてあった。彼のもがいているのが伝わってくる。急ぎたてられるような思いがした。そして、こんな状態ではぼくは本当に駄目だと思う。

8 / 16

裁判闘争がぼくにとって「闘争」でありうるかどうか。むしろ、「闘争」という名辞にぶら下がっているだけだという疑念を覆い隠すことができない。これは、ぼくの関わる領域での全姿勢を象徴している。「味方」によって強いられた「統一」と、「敵」によって強いられた「分離」との隙間で、喘ぐような自己意識の窮屈を覚えている。切迫する生活に追いまくられ、そこにしがみつきながら、なおもぼくには行き場が見出せない。賭けきることのできなかつた、したがって負けきることのできなかつた屈辱が、向こうからとこちらからじつと見つめていて自分を放さない。

今、「味方」から発せられる「統一」および「闘争」の語は、ぼくの内外で既に死語と化してしまった。何故それは死語の命運を背負ってしまったのか。その語の背後にある幻想的水準を計測すると同時に、その語に関わってきた自身の幻想性の水準を仮借なく追跡し切ること、恥も外聞も捨ててかからねばならない。

おそらく、ぼくが「味方」の中で言おうとして言いえないことは、法・国家の手中にあって、あたかもその外にあるかのように法・国家を対象化する幻想上の「闘争」としての「裁判闘争」、同時にそれはまず何よりも、ぼく達の側におけるところの、法・国家についての思想闘争であるという点だ。そして、「統一」とは法・国家に対しての「統一」ではなく、法・国家を超えるような「統一」であり、まったく新たな共同性に向けての「統一」である。名辞として流布される機能的「統一」に居座るかぎり、語はまさしく死語であり続けるほかになく、「敵」のものでしかない組織論を内包して、表面的な硬化と内的分裂の二重性によって、主体は否応なく崩壊していくことを免れない。情況が我々にとって固定しているように受感される時、あたうかぎり個々の現象から離れ去り、かつ、その逆作用として奥深く情況の本質に向かつて突き入ることのできる幻想力を必要としている。

北九州への一時帰省の件、昨日は奥さんに、今日は社長にとうとう言った。何か肩の荷が下りたような気分だ。帰省の費用でわずかばかりの貯えは無くなってしまうだろう。そ

れに友人達にもまだ借金が残っている。考えると気が重い。いざ帰省の可能性が開けてしまふと、いろいろ気詰まりなことが浮かんで来て、頭の中が妙な湿気を帯びてくる。会いたいの肉親だけだ。その反面、過去の家庭の臭気が重たい不安を呼び覚ます。現況を知らせてみたい人も幾人かいる。それも義務感のような、意地のような、見栄のような不透明な気分である。Yは嬉しそうにはしゃいでいるが、土産物の心配ばかり口にする。やはりちよつと不安なのだろう。

8 / 21

昨日、YM君からの会合要請により渋谷駅ハチ公前に行った。

行くのはぼくだけのような気がしていた。日曜日ということもあって人が溢れ、日差しはこもったような熱気で雑踏を包んでいた。あまり繁華街に出ないと、その付近が男女の引き合いの場所だという噂を真に受けて何か息苦しかった。体内の微妙なざわめきを聞きながら早すぎた到着をやり過ぎた。忠犬ハチ公像の周囲にたずんでいる様々な人々を見ていると、その場に自分を置くことに尻ごみしてしまい、ぼくは改札口の正面の壁際に立ってタバコを義務のように吸い込みながら、何気ない待ち合わせの気分を取り繕おうともがいていた。正体不明の冷やかな視線が伏兵のように潜んでいる斜線上の午後。

約束の一時にもう少しであることを見計らって、ぼくはやつと新しい「二グループ」の成立を予定された場所に歩いた。やはりYM君しか居なかった。彼は端っこの方で約束の場所の中心あたりに目をやっていた。彼も息苦しそうに見えた。ぼくに気が付くと、思いがけないほど子供っぽい笑顔を見せて右手を上げた。後に重苦しい観念のまさぐり合いが来るとしても、そんな一瞬をくれる友人はもう他に居なくなってしまった。

他人と向かい合っていると目の置き所に困る。生身であることを意識させてしまう相手の部分に視線が触れると、観念がみるみるしぼんでしまい関係の外郭を溶かし始める。だからぼくはそれと判らぬように逃げながら会話をさぐっている。そうだ。ぼくの会話は相互理解を目標に積極的に切り込んで行く形で成立しない。逃げながら腰砕けのカウンターだ。少しでも相手に当たると奇怪な感触にもう退いている。ぼくは「今までのような曖昧な対応は止めようと思う、相当な決意で今後臨んで行くつもりだ」という意味のことを言い、彼を媒介して自己を逆規定する方向を半ば無意識に強いていた。今日それを言い切ればこの場への参加は意味を持つだろう。だが、歪んでいく言葉と自分の本体との間隙は計り知れない。森の中でのあやかしのようにぼくは端緒に帰って来る。そこには確かな足場が無い。来た時と同じように素手のまま、ぼくたちはお互いの自然性に向かって別れた。会話中にふいに引き出された「Aさんに会おう」という願望は、彼女の不在が空しく宙に浮かせたまま。

今日のぼくは不安との小さないさかいを繰り返しながらも機嫌が良かった。ぼくが機嫌を良くすると、Yは眠くなるようだ。ぼくは無理やり十一時過ぎまでテレビを付き合わせ

た。彼女はいつも丸太のようにゴロンと眠る。眠りを吸い込んだ彼女は自分に帰っているのだろうか。

8 / 30

今度の九州帰省でぼく達はスツカラカンになる。しかし、何か転機の前感も孕んでいるようで胸が苦しい。父とは今後のお互いの生活のことなどじっくり話してみたい。まず何よりこちらの生活をもっとしっかりさせなければならぬ。父も母も、もう若くはないのだ。妹も適齢期だ。子供たちもズンズン成長して行く。だが、裁判が一段落するまでは東京を離れるわけにはいかない。控訴審に入れば事情によっては北九州に行くつもりだ。今はまだ漠然としている。本当の課題を白日のもとに引きずり出し、生涯それを担って行く力を獲得するために、けっして自分の時間に保留を付けてはならない。思考の鍛錬と表現の模索を進めよう。焦らず自分なりの速度で。

9 / 1

被告団事務局から「拡大被告団会議」と銘打つ会合への招請状が送られてきた。封筒には組織名称と代表者のスタンプが押されており、事務所の人に工場で手渡される時、窮屈さと前のめりの軽い快感を覚える。秘密めかした所作をそれとなく演じている。世間的な劣性を有意味な劣性に転化したがっている内心の動き、劣性という意識は、頑固な現実のような他人の像に対して頭をもたげる自虐的優越心にはかならない。現況に厳しく立脚しているならそんな心理は消化しているはずなのだ。

九月四日のこの会議には出席したくない。会議の性格があらかじめ予想できること、ぼくの考える被告団や裁判闘争のイメージと全く食い違っていること、それによって招請者の背後の党派性にいささか脅迫観念も抱いていることが理由である。今まで主導的な様相を呈していた三・四グループが控訴審に入ったのを契機に、停滞はなほだしい四・二八公判闘争を再興したい事務局の意図は文面にありとうかがわれた。もし出席するならば問題を本質的に提起し、思想原則的に、指導グループの人間たちと正面から対決しなければならぬ。しかし、今のぼくには勇氣と力量があまりに不足している。何よりおっくうで、嫌な場所を避けたい気持ち強い。彼らの論理は反体制運動という閉ざされた場においては生活感のように頑固で手ごわい。本当にべったりとした生活感のようだ。思想が現実の生活感に接近するためには、目くるめくような幻想的回路を地道に潜り抜けねばならないはずなのに…。それが分かっている、実際その場に入ると妙にその場そのものの現実感を押し付けられ、思考の突破口を塞がれてくる。あの感じは重苦しくて不快だ。日常の中で触れる支配直通の生活感と或る意味共通する、打ち破らなければならぬ忌々しい感じがそこにもある。どうやらそれは有効性に向き合う運動原理と、そこに引き寄せられるのつべりしたプラグマチズムのようなのだが…。

〔敵〕の正体を明確に見据えないかぎり、そして、自他の深部に到達する火のような言

葉を創出しないかぎりぼくは流され続けるほかない。

昨日、tを連れてブロードウェイに出た時、幸せそうに演説とビラ配りをやっている既成政党下の青年男女に、身内の震えるような嫌悪を覚えた。テレビを見ても他人の中に居ても近頃拒絶症患者のようになってる。これを持ち越えるには、自己を何事かに強いるほかない。

9 / 2

4日の被告団会議に出席することにした。「することにした」と記した後は無類の恥ずかしさがやってくる。ぼくはYM君に追隨的にそう決意したのだ。その場での孤立を一人で持ちこたえられないという思いが、出席を曖昧に拒否する方向に傾かせていたのだが、もし、彼が出席するなら自分もぜひ出るべきだと、臆病な結論を下した。彼は既に出席の意向を事務局に伝えていた。ぼくは電話機の向こうにいる彼に向かって自らの優柔不断をごまかしにかかっていた。一人で立っていることがどうしてできないのか。この気弱さ・臆病さがぼくの人格の本質なら、ぼくは何処にだってそこからしか出発することはできない。そこから出発しながらそこを超える方法はあるのか。

宝くじが外れた。いや50円当った。先の日曜日、買い物に出た時それを買ってしまった。Yとぼくは互いに気恥ずかしかったが、また、その気恥ずかしさをはぐらかし合うほど二人とも期待をふくらませてしまった。「八百万円当たら、ぼくはもつと勇敢に人々の間で振舞うことができる」と、復讐心のように思ったりした。いつも絶壁に立っている生活は時々そんな夢想を呼び寄せる。お互いがお互いでなくなる時を恐れながら、その恐れの後背に光のような誘惑を感じたりする。

ぼくには趣味がない。Kさんや洗濯屋さんは、小鳥・熱帯魚・金魚などを飼ったり、植物をいじったりするのが好きである。魚釣りなどもよく行くらしい。こまごましたことへの丹念な彼らの手つきや、生活の場をそういうところからも楽しく作り上げて行こうとする無意識の所作がぼくは嫌いではない。でも、今のぼくにはとても真似できないと思う。あきつぼい性格にもよるだろうが、そんな気持ちのゆとりがどうしても掴めない。かといつてぼくに全てを賭けた仕事があるわけでもないのに。苛々と時を浪費し、妻子の存在感に紛れ込み、借り物の御託をもてあそび、酒を飲み、巧くもないボーリングやパチンコに行きたがる。しかも、へんに自分を捨て切れぬ。

9 / 3

北九州帰省の日まであと1週間に迫った。待ち遠しい。もう3年帰っていない。妹は電話で「迎えには行かんけどちゃんと帰って来れるん、小倉も変わったけね」と冗談交じりに言っていた。懐かしい半面不安も大きい。或る土地を故郷にしてしまうのは何が原因だ



ろう。肉親の息遣いに濃密な時間が感じられるからか、個人史の開始に関わる空間に引き寄せられるからか、…故郷は遠きにありて…という抒情は親しいけれど、ぼくは放物線を描いて故郷に帰りつつあるのを感じる。諍いと窮屈と悲惨が剥き出される予感に横合いから脅かされながら、やはり自分をそこに置いてみたいという願望に引きずられている。

結局、土産物は発つ数日前に買うことにして、ぼく達家族は駅前の繁華街をブラブラ歩いた。人波に疲れきった午後五時過ぎ、Y M君と会って自宅に伴った。tは彼を覚えていいのか、手をつないではしやぎ始めた。この頃家族以外の者が加わると、とても嬉しそうだ。

Y M君とは話さなければならぬことが沢山有るように思うのだが、会っているとお互いしんみりしてしまい、なるべく底の方から底の方から話そうとしているうちに先端に浮き上がれなくなる。

今日ハツとしたのだが、めずらしく彼が「送って来ないか」と言うので一緒に外に出て歩いてみると、「土産がわりに何か買うから、家族に持って行ってくれ」と言い、それにあらがうぼくの腕を掴み、肩にかけた手の温もりをじかに感じた時の、何か不意打ちのような思いだ。もうずっと以前から、ぼくは妻や子供たち以外の生身の体温に触れたことがなかったのではないか。親しみを表す所作にそういう形があるということが、何か衝撃のように思われた。そして、彼とぼくの外部への関わり方の違いは、こんなところにもあるのではないかとふと思った。生理的な色相を帯びたぼくの思想の形がぼんやりと内部にうかがわれ、少なからずうろたえていた。

明日は苦しい日になるだろう。その苦しみを、自己と世界を同時に生み出すための苦痛であらしめたい。

9 / 4

拡大被告団会議は思ったほどの紛糾もなく、いつもの位相で流れるように終わらざるをえなかった。しかし、この終わりは何ものかの開始として、ぼく自身の中に位置付けられずには済まない。

\*ぼくなりY M君の限界

1. 被告団の共同性の問題、〈統一〉あるいは裁判闘争の深化の問題を、本質的に提起しようとする時、事務局との対応関係を基軸に持って来ざるをえない。このことは何に由来するのか。

2. 「統一公判闘争は持続的に闘われねばならないし、そのためには各自の生活や思想の不均等性を調整する機関として事務局は必要であり、被告団の共同性の問題は、事務局の必要性を揺るがす問題としてではなく、その必要性の上に立ってお互いの討論なり表現なりで深化されていくべきだ」という大概の見解に対して、事務局不要性あるいは

解体という明確な形で対応しえない。

3. 新たな共同性あるいは裁判闘争のイメージをプランとして具体的に提示しえない。
  4. 分担金を払う・払わないの問題が単に現実的な対応の仕方としてではなく、幻想性の水準としてどのようなものを背後に有しているのかを言語化しえない。
- これらの問いに答えながら手離すことのできない課題を煮詰めて行くこと。ぼくを「代行」しうるものはや何処にも無い。

9 / 5

YM君に「表現の技術」という言葉について聞いた時、「ある程度、ものを書き込まなければその時代の幻想水準に到達しない。もし、表現の技術ということを、その幻想水準を把握し踏まえること、という意味あいと言うならば了承できる」と語った。

気圧の壁のような日常を膨大な何かの予感がよぎって行く。

公判闘争において今まで先験的に思っていた自分の思いを取り出してみる。

1. 裁判闘争は後退戦である。法・国家を問い、はね返ってくるものを思想的に取り込んで行く自己内闘争として深化させるしかない。
2. したがって、事務局から出される具体的訴訟段階ないしは反体制運動の一環としての戦術・方針・総括等はある程度許容せざるをえない。
3. 経験を積んでいる被告団事務局は事務処理のみならず指導機関としてふるまい、そういう実質を持つとことで各被告の闘争を支えている側面もある。
4. 自分が三重の共同性に疎外されているのを感じる↓法・国家という共同性、生活次元の共同性、反体制運動という共同性。
5. 乏しい条件を最大限活用して、人間のあるべき原形に向かう姿勢を、内的に運動させることによる自立。

このような錯綜する思いが現在までぼくの公判への関わりを規定してきた。そこには、情況に対して自己を守護しようとして取られた無意識的な判断停止と、後向きな思考閉塞が象徴されている。情況からの逃避の一つの形が見える。しかも、こういった観点さえも徹底して持続する方向が見えないままであった。「裁判闘争とは何か」について、初めから捉えなおさなければ、名辞としての「統一公判」からもずれ落ちて行く危機的な時間をたどっている。

〈事件〉に影響を及ぼした政治的言葉の正当性に固執する、という核の周囲に全て収斂させ、他動性に対して無批判な自己運動を繰り返すかぎり、個々の敗北を超える何も創り出せないのは当初から予感されていた。この予感に形態を与えるべきだったのだ。

今言えることの第一は、裁判闘争を、幻想の共同性の問題に根幹から肉迫しうる思想闘争として捉え直さなければならぬということ。第二に、〈被告団〉という共同性は、ど

のように、如何にして、形成されて行かねばならないか、本質的課題に据えて追求しなければならぬということ。

この二点を逃す時、裁判は個人史の中の重要な一事件というだけの意味に閉じられてしまふ。つまり「分離」公判は完結させられる。固定的な闘争のイメージを転倒しなければ、ぼくの言葉は他の人には通じないだろう。

昨日の拡大被告団会議において、争点は結局、ぼくとYM君の「分担金支払拒否」の件に絞られていった。この問題はおそらく被告団内部の感性的せめぎあいとして、本質的な部分を引き出している。ぼく達への批判の論点はほぼ次のように定式化できる。

闘争持続の絶対性↑↓被告各人の時間的物理的制約

←

事務局の絶対的必要性

←

事務局を媒介項とする被告団内部の共同性および闘争の深化

この定式から必然的に導き出されるのは「分担金支払拒否」ナンセンスという結論である。またこの定式に輪郭を与えるために付け加えられるのは事務局は指導機関ではなく一種の事務代行機関であるという性格規定である。こういった性格規定は情況の中にあつては意味をなさない。望むと望まざるとに関わらず、主観的な思惑を超える関係を強いるからである。だからこそ、民主主義や社会主義を標榜する機関が最悪の支配的機能を持つという逆立が生ずるのだ。ここに抜け落ちているのは闘争の把握から組織論に至る全てだ。確かにぼくも、闘争のプランや明確な組織論を今もって提示しえない。単に力量の問題ばかりでなく、そうしえないことには或る必然性がある。しかし、闘争の本質的な把握そのものの内に「組織論ならざる組織論」は予感せられて在る。

何故、ぼく自身も含めて、彼らは事務局の必要性を強調する前に闘争そのものの把握に本気で取り組まなかったのか。そして、一切の代行機関を必要としない闘争形態の模索に出發しなかったのか。この問いを發する根拠は、全ての反体制組織の共同性が擬似共同性としてしか成立しないという点にある。生活次元で個々バラバラに切り離されているぼく達は、もつとも脆い共同性を、かろうじて幻想的に成立せしめているに過ぎない。この擬似性を超えて行く道はあるのか。

ぼくに少し分かってきたのは、変革の意志の結集が現実社会に固定した位置を占めようとすることは、法・国家に対する究極的な批判として常に最深部から出發すべき共同性の根幹を腐らせやすいということである。組織が前提されて闘争形態があるのではない。闘争の本質があり、その闘争形態の模索の内に組織論は生まれてくる。ぼく達は各々の現実的諸条件と貧しい幻想性から出發し直すべきだ。今回の問題は事務の代行は必要か否かの問題ではない。まして「様々な考えの人間が居るだろうが、徐々に調整しながら闘争し抜こう」という言い方ですり抜けることはできない。個々人が闘い抜くということを本質化するために、飛び交う諸々の名辞を転倒し、各々の根拠から開示し切って行く方向を明示

しなければならぬ。

9 / 6

ミュンヘンオリンピックの選手村にアラブゲリラが侵入し、イスラエル選手団の数人を人質にして、捕らえられた仲間の釈放を要求するという事件が起こった。結局、ゲリラと人質の大部分が死亡することによって事件は一応の通過をみた。

このことについてKさんは、ゲリラの無謀と殺りくを激しく憤っていた。ぼくはそれはどう応えてよいか分からなかった。分からないなりに自分の心情を表白せざるをえない思いに急ぎ立てられるのを覚えた。Kさんの言葉は、現在の日本あるいは世界における一般大衆が、この事件から受けた衝撃の質を明確に象徴していると思われる。ぼくは彼と話しながら、何か醜怪な一般性と争っているような追い詰められた気分を味わった。心情として表出される言葉に解釈が切り込む術はない。その心情の中に政治性があり、強固な幻想の水準がほの見えた。ぼくは、「世界の平和」という美名にくるまれた空間に「世界の矛盾」が噴出したことの意味を、それぞれ自分の足元で問うことでしかゲリラ達の行為を批判し切ることはできないと言いたかったのだが、ゲリラを狂人あるいは愚劣なる犯罪人として抹殺していく巨大な量への嫌悪におしまくられ、自己の心情が被虐的に歪んでいくのをどうすることもできなかった。Kさんは、比喩的に「他人の家に土足で上がりこむような行為だ」と言ったが、比喩ではなく、彼のような位置がこの事件から受けた基本的な心理のさわりである。この今の安定の内側に居たいという彼の思いをぼくがどうして否定できるだろう。それを否定できぬぼくに、彼の言葉の強さに匹敵する自己の言葉を対峙させることはできない。ぼくはみるみるうちに気弱な政治青年の顔つきになっていった。不透明な憎悪が沈黙の中をゆっくりと転がって行く。おそらくぼくは、ゲリラの一人と話していたとしても同じ顔つきになって行くだろう。

世界はあまりに暗い。しかし、ぼくは性急に光を求めて事実から上向きに思考するのではなく、事実から「現実」の方へ執念深く降りて行かなければならぬ。

ぼくが闘争を幻想性の変革として抱え込み、徹底させようと意図する時、ふと感じる頼りなさは、全てを表面に浮き上がらせようとする情況的水圧に押し戻される結果であろうか。

五百円の分担金支払拒否を単に事務局に象徴されるものへの拒絶反応としてではなく、新たな「闘争」の開始として純化せしめる方法は何処にあるのだろう。それはけっして外在的には存在しない。ぼくが五百円支払うことによって回避して来たものの全てを引きずり出し、眼前に据えること。あらゆる時間的物理的制約を依存によってではなく、自己に突き戻すことによって越える方向はあるか。「闘争」への参加ではなく、「闘争」を不断に創り出す主体として立たしめること。発語・沈黙・文章化・身体的動作全てを「表現」と

して普遍化すること。それぞれの〈表現〉を完結したものととして孤立させないこと。〈表現〉を内部から固定させないこと。

9 / 7

十日（日曜日）には二グループの会合が予定されている。次回公判は十九日（火曜日）である。ぼくはその間に北九州帰省を予定した。この日程は息苦しいが、1967年夏、故郷への長い道のりをひたすら歩きつづけたように、今度は新しい家族を伴って先の見えない道の一端に足を踏み出してみよう。

9 / 8

注意深く前方に目を凝らして歩いて来ても一切が見えなくなる瞬間がある。どう動いたらいのか見当がつかない。蒼白の時空を前にやつと自分を持ちこたえている。緊張が途切れて甘ったれた仕儀に突っ走るのは時間の問題だ。妻子は揺すぶられ、家の片隅に吹き寄せられながら、ぼくの本質への信頼を一瞬ごとに回復しようとしている。そんな目に見詰められると、ぼくはいつそう行き場を失い、感情は粉々になり部屋中を浮遊する。

9 / 12

今、北九州にいる。父母と妹がすぐ傍にいる。家族を伴った初めての帰郷は、貧しさと優しさに包まれている。閉山で払い下げになった炭鉱の社宅は古くて狭いけれど、ぼくはウトウト眠り込みそうだ。Yが実家でそうであるように、やはりぼくにはここが居心地いいのだ。子供の自分に引き戻される。しかし、それも束の間である。眠り込んではいけない。厳しいところに居なければならぬ。それがこの先ぼくの生きて行く根拠だ。

10日の二グループの会合には、ぼくとYM君・Mさんのみ集まった。出席しなかった者もおそらく、それぞれ自分の根拠に突き戻されズブズブ足踏みしている。そこから歩き出すには、観念を千里も万里も先に歩かせ、肉体を無視するほど遠くまで行かせねばならない。だからといって、何も予定されているわけではない。公判闘争は一つの局面を迎えている。Mさんは「とにかく一人から始める」と語った。手探りで手の届くところからやって行く決意を示した。ぼくとてもそうであったが、そうであると思ひ込んだ以上にそうならざるをえない、10日はそんな日であった。

ぼくは、まず、YM君の出した即時抗告申立書と高裁の決定文書を対象化することから課題を整理しようと思う。公判過程においてこれらの文書の持つ位置を見極めよう。おそらく、裁判所側と、被告団の踏んでいる時空上の交点を意味するだろうし、意味させることだ。交点の先には裁判所の引いた点線が見える。この点線を転倒する表現を獲得できるかどうか、ぼくにとつての公判過程の今後がかかっている。

それにしても、脆弱なるかな、ぼくの幻想的四肢。

9 / 13

風邪をひいた。……

9 / 16

風邪が治らない。滞在も既に後1日を残すのみとなった。思考停止のまま何日も過ぎて行く。ここにこうして居ることも何かの保留であり、東京の生活も何かの保留だ。嘘寒い荒涼とした気分だ。

職業とは何だろう。その言葉から何の信号も受け取れない。父と「何か仕事を始めようか」と毎日のように話した。しかし、そう言いながら本当は何もイメージできていないのだった。

9 / 21

北九州から帰って来て、気持ちに穴が開いている。十九日の公判の整理作業を保留。

10 / 12

一字も書き付けることのできない日々が続いた。多くの事件があり、多くの想念が頭上を通り過ぎた。けっして忘れてはならないものもあつたらう。しかし、記憶は遠くかすんでいる。残留している感覚を怠惰がモクモク食んでいる。

「自分を見ないで済むようになることが大人になることなの。そうすれば昔のように雄々しさを演じることもできるでしょうに……」

暗い夜道で急に飛び出したヘッドライトのように、斜めに視界を切る羞悪、…あ…と押し出される声、目を背けようとして拡大する光景。

10 / 13

七月十三日付で出されたY M君作成の即時抗告申立書についての対象化。

この申立書を裁判所側と被告団側の表現の交点に置いてみる。そこから現時点で法的包囲網の性格を分析する。それを媒介に公判過程の今後向かうべき表現の軸を構想する。

この即時抗告申立書を単に一被告の代行によって司法権力に提出された攻撃文書というだけで見逃してはならない。それ以前とそれ以後の公判廷のあり様が決定的に変移しつつあることから見ても置き去りは許されない。

「二グループ」の公判は、新関裁判長によって審理方式をめぐる意見表明の場を与えられ、他グループが強権的に審理を進められたのに対して、比較的ゆるやかな進行状態であった。このことよってぼく達の内部にかなりのゆるみが生じて来たのは確かであろう。重く淀んだ時間であるとしても、他グループに属した被告達とは異なり、長い時間の鎖で裁判に繋がれることになった。

昨年十二月六日、新関裁判長は我々の意見を聞き終え、「あくまでも訴訟法に則つての説明」と自らの言葉の布石を敷いた後、審理方式として被告側が主張する「統一公判」については、「当事者主義と裁判官の能力の問題から適正規模による併合審理によるほかない」として現グループ別公判を正当化した。また被告側が主張する理念的な〈統一公判〉については、「刑事訴訟の場において裁判所が関わるのは行為の違法性であり、思想信条は対象化不可能」として、裁判の現在の理念の頂点を明示することによって、審理をめぐる被告側の意見表明を打ち切った。

ここで注意しなければならないことは、少なくともぼく（達）はその時まで理念としての〈統一〉と、審理形態としての「統一」という具合に両面的には把握していなかった。「事件の本質を明らかにするためには統一公判しかない」という言い方をしていた。

この新関決定の後、「あくまで統一公判を」という掛声の半面、起訴状に関する求釈明などの事実上「分離公判方式」への乗っかりをやむなくされ、その準備を嫌々やらねばならなかった。続く公判廷において意見表明の地点を守り抜こうとして冒頭手続のうちいくつかを退廷等によつて失った。

今年5月頃、突然新関から鬼塚に裁判長が換わった。裁判長が簡単に換わりうるということは、同質の〈行為〉のぼう大な闘争参加者を背後に抱えながら、被告の位置を交代できない側からすれば少なからずショックであった。三名の分離被告が出た。

鬼塚との出会いはまず更新手続の紛糾によつて始まった。新関の敷いたレールを突っ走るしかないであろう鬼塚の態度はかなり強硬なものに受け取れた。二度目の出会い、彼の忌避を申立てる。当然のように「訴訟遅延の目的を持つ」として却下、これに対して即時抗告し、YM君作成の申立書が提出された。高裁は「理由なし」としてこれを却下。

以上が今までのだいたいの経過だ。

前回9月19日の公判は、裁判所との対峙というより、その手中で行われた初めての公判である。即時抗告申立書は被告相互の隙間に浮いたままで。この法廷で、鬼塚裁判長は余裕を見せながら、再三「証人に意見や想像を質問してはならない、見たり聞いたりしたことを直接聞くべき」とか、「弁護士と被告人の方でよく話し合つて調整し、円滑に審理できるように」などと言いつつ放った。法廷における本質的矛盾の噴出に対する規制の意思が露骨である。この逆を突きたい衝動がこみ上げる。被告達が同じような顔つき、言葉つきで画一的に対応すれば司法の思うつぼだ。

はつきりしておくべきなのは、「統一公判要求」から「法的防御権の実質的行使」へと移行して行くその裂け目に鬼塚忌避とその却下が位置している点である。そこに至る過程とその結果は、四・二八公判闘争の現実と今後の変移の方向を示唆しているだろう。

忌避申立は、裁判の包囲網の狭まりの中でいよいよ先が見えなくなり、自分の位置が判らなくなつていった被告達はその判らなさを運動させようとして打ち上げた花火である。事実は線香花火のようであつたとしても。

公判前夜の会合にぼくは行かなかつた。事務局との決別の心情が消極的に働き、ぼくを

その場に行かせなかった。ほとんどの被告はその会合に非在した。出席者の幾人かが「忌避」の案を練り、公判開始直前に案を伝え、休廷時間に一応の確認を済ませて臨んだ。

個々人は既に深く断絶しており、相互に自己を閉ざしていた。そして、ただ公判過程の内包するものの判らなさにおいて、忌避申立を口ごもりながら共闘しようとした。「却下決定が下っても即時抗告まではともかく行けるだろう」と、ぼくは人ごとのように漠然と考えていた。実際に申立が却下された時、決定的な判らなさに閉じ込められでもしたのだろうか。いや、そうではなく、判らなさから、地すべりのような鈍い敗北の音に包まれ、延外へ引きずり出されて行くのを感じていたのではなかったか。即時抗告申立書をY M君に代行させる方向になし崩し的に向かった被告団は、公判闘争の裂け目を目をつぶってみたいで行ったのではないか。闘争であろうとするかぎり開示し切らねばならない幻想領域の闇を…。

一人の被告の手による十三名の名前の列記と押印、それに規定された文章の背後には、Y M君の顔だけでなく、列記された他の被告の顔や姿勢も見える。申立書の文章はそれ自体としてはよくできており、でき過ぎているように思える。このことは逆にぼく達の公判闘争の無残さを証明する。高裁の決定は、しかし、この無残さの底にあるものを包括しない。

〈法はやがて自らが切り捨てて行くものによって報復されるだろう〉

もし、ぼく達が今後も法的時空に食い下がって行こうとするなら、この「闘争」の無残さをきれいな何かに置き換えてはならない。この負性をどこまでも対象化し、運動化していくことを抜きに「闘争の持続」もへったくれもないのだ。

前回公判の後、N君は「我々が立たされている局面で政治的に立たねばならない」という立場から今後の公判闘争の目的を「無罪を勝ち取る」という点に定め、戦略として「敵のくりだす証拠をひとつひとつ潰していく」という方向でやるべきだと主張した。

過渡期というものの本質が分かっているという批判は口幅つたい。政治的な効果としては負性である位相を果てまで潜り抜けるところにしかぼくの内からの闘争は成立しないとしか今は言えない。

10 / 14

ありふれた事柄の方に出発しなければならない。

タバコを止めようと思い、ここ4・5日吸っていない。数日前、D君とM夫妻が訪れて結構楽しく飲んだ。彼らが帰った後に血の混じったやつを吐いた。いささか神妙な気持ちになって、どっちにでも転ぶ危うい姿勢ながら、「タバコを止めようと思う」とYに言うてしまった。以前（1年位前）も半年以上止めたことがあった。タバコがないと皮膚の下の部分で時空と接している感じがある。既にこうも思い始める。「吸わないことを習慣付けるのもナンセンス。タバコなんかどうでもいいという境地が本当は望ましい。有害でな



いものなんてこの世に無いじゃないか。」こりやあ駄目だ。

いきなり今晚から魚釣りに出発することになった。気乗り半ばの状態で準備した。何かを心から楽しめるかどうかも一つの冒険だ。

10 / 16

釜無川の上流にヤマベ釣りに行ってきた。Kさんと社長の息子のM君に随伴した。休みの日に妻子の傍を離れるのは何かふつきれないものがある。家に居ると突然荒れ狂って皆を困惑させるのがおちなのに、いざ一人で何処かに行くとなると尻ごみしている。タバコと同様「家庭」への依存か。

釣りの場所は山梨県韮崎の市街から松本方面に10キロほど行った国道沿いの河原であった。土曜日の午後10時頃出発、着いたのは午前0時半頃だったろうか、車の中で一眠りして、明け方5時過ぎには毛ばりを流してみる。冷え冷えとした朝だった。ぼくはカーディガンやジャンパーを着込んだ上に、Kさんに借りたアノラックで防寒しなければならなかった。

岩と砂で鮮明に縁取られた川の形に沿って水は勢いよく走っていた。淀みに突き入り川底を引き剥がすほどにも流れは強かった。甲府の方向に富士の影がゆったり立っている。飯をほおぼっている時と、仕掛けを取り替える時以外は、3人とも水際で黙然と竿を構えた。子供の頃、近所のドブ川でドジョウをすくったり、マブナをねらって淀みに釣り糸を垂れたわずかな記憶しかない。こんな釣りは初めてだった。釣り上げた時の気分はさすがに爽快だった。竿がしなり、視界にキラキラ流線が踊ると、眠っていたぼくの狩猟願望も跳ねた。川面の反射に目を赤く充血させながらいつしか時の経つのを忘れていた。

料理人の経験も豊富なKさんは、収穫を早速フライにして分け前を持ってきてくれた。食べる喜びは釣り上げた時に比べて強くはない。

10 / 17

Yが写図技術の練習を初めて4日くらいになる。帰省を契機にぼく達家族はより真剣に生活設計を考えねばならない切迫を感じた。父と溶接の下請みたいな仕事をやるうかという話しになり、それを目標に公判の一段落するまで、準備や勉強を進めてみようということになった。「公判の一段落するまで」という言葉は、幻想的なぼくの位置とはなはだしく矛盾するけれど、生活レベルの会話ではその語は頻繁に飛び出し、そのたびに気持ちはナメクジのような形になるが、あいまいに衝突を流し続けている。

せめて製図くらいは読めるようになりたいと思い、様々な通信教育の案内を取り寄せてみた。たまたま新聞でトレースという言葉が目につき、女性向きだとのキャッチフレーズなのでYに見せたら、「ぜひやりたい」と言い出した。ぼくの方は電話で父に相談したりして、機械設計製図というのを勉強してみる気になっていた。金銭的には一人分の教育費

しか捻出できないので、まずYの方から始めてみるようになった。口では賛成しながら、苦手な理工系の勉強をやるうと気負い立っていただけに、機先をそがれた気がした。独学で少しでも機械関係の知識を得ようと、初歩的な本を買い込んできたが、4分の1ほど目を通して見たものの、系統立った勉強方法は皆目分らないし、次第にやる気もそげてくる。

「生活設計」もなるべく遣いたくない言葉の一つだ。

二人だけの時間を1年と過ごす間もなく、ぼく達は親になった。「生活設計」とか「生活水準」といった言葉を遠隔に追いやりながら、出たところ勝負の毎日だった。「永住するから」と八丈島に渡ったのに、1年足らずで東京に舞い戻り、いくつかの会社を転々とした。この3年の間に、島で生まれたtと、Yの実家で生まれたyという新しい家族ができた。その後も一向に腰の定まらない生き様に周囲はやきもきしていることだろう。Yの親たちがこの職場を紹介したのも、凶状持ちに引かかった不運な娘と、罪のない孫達への切羽詰った思いだったに違いない。

先日、丸井デパートで割賦販売の台所セットと整理ダンスを買った。家具が二品入ることとで生活空間が輪郭を帯びた。それまでは食事と睡眠と団らんの境界がぼやけたまま一緒くたに部屋に詰め込まれていた。「これからは住みよい環境を意識しないとイケないかな」と呟いたら、Yは「そうね、なんだか、わたし、そういうことを口にしたたり、考えたりしてはイケないような気持ちはずっとしてた」と言った。この3年間を彼女はそう総括したのだ。

「生活設計」といった言葉をすんなり遣うような自分達になってしまふのは身震いするほど嫌である。この世界のどこかに、ゆったり体の納まる場所を、最高の目的のように欲しがる自分達を肯定したくない。(ぼくにはそれが許されないのだ。何人も人を殺めていい。Yも共犯だ。)

10 / 18

表現の衝動は今の自分のどこにあるのか。ずるずる奈落へ後退し続ける不毛な意識。

仕事中、犬に噛まれた話しや犬をからかった話が出た。そう言えば、島尾と魯迅が犬をテーマにした短文を書いていたのを思い出した。

ぼくは犬を嫌いではない。小学生のころ親しみを込めて近づいたら突然太ももをパクリとやられたことがある。あれ以来信用しないことにしている。

江藤淳の「夏目漱石」を読んだ。硬質の倫理観に貫かれている文体は、読んでいて気持ちがいい。ただ、氏は初めから意図的に、安定した幸運な位置を占めている感じがして、妬みのようなものも介在してくる。

「マチウ書試論」について。

観念運動の限界まで登りつめた地点から下降的に語り始めた時、すなわち革命の不可能性を「大衆の原像」の方へ突き抜けようとした時、「関係の絶対性」の対極に透視されたであろう。「観念の絶対的相対性」とも言いうる壁はどう処理されて行ったのだろう。それは、個人や何らかの共同性がそのつど内包的に対処するほかない壁だ。観念領域を通過しない問題の対象化はありえないし、この世界に矛盾があり、人がその矛盾に直面するかぎり、革命や希望の観念を志向する存在は消滅しない。だからこそ、吉本の自己思想の定立においては必然的に両輪が呼び寄せられるのだろう。両輪ということが肝要だ。「関係の絶対性」は争鬭的加担を強いる観念運動の意味的根拠を、「大衆の原像」はその価値的根拠を表出しようとしたものだ。

10 / 19

島尾と魯迅の犬に関する短文は比較しようもないほど異質なものであった。しかし、町角で犬に出会ったという設定から呼び起こされる両者の感慨と、その結末には大いに感興をそそのめるものがある。両者とも超現実的な犬との出会いの場を設定している。魯迅の場合は「夢」と明確に記述して「夢」ならではの犬との対話が中心だ。島尾の場合は作者の心理状態そのものが超現実的な雰囲気をも出し出す。犬・自分・犬の飼主のもつれ合う関係妄想が荒野のように空漠とした世界を暗示する。

中国変革期にあつて避けようもなく文明批評の苦悩を負った魯迅の文章は、現在から見れば、犬との関係付けがあまりに図式的にも見える。犬を批判する「自分」に投げ返される犬の側からの反批判は、「自分」が人間であることを否定したがつている作者の陰の声だろうか。こう感じるのは、竹内好訳の魯迅の作品に、自己の批評意識自体の抹殺願望がかつて読んだ気がしていたからかもしれない。彼が犬から逃げるのは、その陰の部分の願望を深く内包したまま人間的世界に身を置き続けようとするもがきの象徴ではないかと思う。

島尾には魯迅に見える影の部分は感じられない。文章全体が一つの心的異空間を形造つてしまう。おそらく意識的ではない。魯迅のような主体的な肉声ではなく、形成された異空間の振幅がしゃべっている。実に不気味だ。魯迅の犬は犬でなくてもかまわないような激しい作者の自意識があふれ出ている。しかし、島尾の犬はまさしく犬でなければならぬ。

夏を逃れて秋の暗夜を渡って来る終電車が

街角で見つけた僕を拾って帰る

ジャンパーの襟を立て

耳まで深々と自身の肩に埋まりながら

座席の端っこで僕は小刻みに震えているだろうか

車窓の中の僕の眼は僕を見詰め

僕は何を見ているのかを知らないまま  
町々を通り過ぎているだろうか

10/20

ぼくの感傷が口を開くのを見計らったように1冊の詩集が届けられた。並んだ文字の調べは上ずっており、力みが満面に見られるけれども、ぼくが通り過ぎ、ぼくを通り過ぎた作者達の呼吸がよみがえる。力み返そうとする自分を感じながら懐かしさに駆られている。

空気が荒れてくると、時間軸の裏側に頭を突き出し、足だけがいてる日が続く。

個人史と世界史の交点、いつも…

「あなたってコメディアンになれるわよ、素質十分だわ」

「愛の幕間に引き出される男はいつもコメディアンなのさ」

「きゃー」

今日の区画を破りながら明日を引き寄せる。それは既に明日ではない。

10/21

晴れ間を取り戻しそうだった空模様がまた崩れ始めた。明日に社員旅行を控えて、工場の面々の思惑も空模様のように思わしくない。抑圧されながらの小さな期待と、雨雲のような憂鬱に挟撃されて、それぞれの表情と言葉が通い合わない。洗ビンのことで些細な意見の衝突があったのをきっかけに、みんなの気持ちが四方に分散した。

KさんとYさんの会話が、潜在していた互いの不満を一挙に浮上させた。表面的には、ぼくを含む「男ども」二人と「女ども」二人の、仕事の割りふりから来る無言のにらみ合という、いつものパターンだ。

吉本の「大衆の原像」には二重性がある。彼の父や岩淵五郎や私塾の先生に象徴される放棄・献身・忍耐を無言で生きた大衆像と、横丁の駄菓子屋のばあさんや学生を袋叩きにして警察に突き出す魚河岸のあんちゃんに象徴される大衆像。前者を着地点とすれば後者は様々な現れ方の切断面だろう。「生まれ…子を産み育て…」と言っても人間のあり様の切断面と着地点では雲泥の差がある。この二重の「大衆像」の距離はもつとも近くにありながら実はもつとも遠いのではないか。いや、幻想領域の基層として定義される「大衆の原像」は、現実⇨関係の包括的抽象像だから具体性を直ちに指し示す必要はないということか。

「大衆」とは「知識人」とか「前衛」とか「…」といった言葉に対応する関係概念だ。氏の思想のプロとしての位置を写している。ぼくは、具体的に着地したい生活者の像として受け止めたし、不可能な自己像であるほかない点で一義的な概念だ。もし、「妙な上昇願望とか当為を抜いた裏目なしの君のあるがままが「原像」に一番近い」と言われたとし

ても釈然としない。具体的な関係の場面に思想的「像」がどう絡むかは、問題がはらむ时空の構造と遭遇者自身の全的な変革度に帰するだろう。であれば、吉本の二重性は具体的な問題に影響を及ぼさないのだろうか。そうは思えない。切断面としての「像」には場面面で恣意性が侵入し、矛盾の固定化として作用する可能性がある。言葉が力を秘めたものとして一人歩きし始める時は特に。

ささいな事柄にも、見えない関係の領域が絶対性として存在する。現実く状況を包括する視点（否、むしろ姿勢というべきか）は、「大衆の原像」という言葉をはみ出す混沌に戻りつつあるのではないだろうか。

10 / 25

22〜23日は慰安旅行だった。給料日前でもあり懐具合は悪く、どうせ福利厚生費で落とす税金対策のくせに、いかにも面倒見ていると言わんばかりの経営者らの顔つきがしゃくにさわって、観光の楽しさは半減した。熱海という場所も先入観からか好きになれない。ただ、久しぶりに海を見たのは良かった。帰り道、小田原近くの河原で釣りをやり、大きなハヤを釣り上げたのも気分よかった。魚は恨めしそうな顔をしていた。

一日でも家族と離れているとぼくは余裕を失ってしまう。時間の流れが中断され、自身の表情を禁じられているような強張った感じがある。逆に、そういった緊張から逃れるように軽薄に振る舞い、後悔の種を残すのが常なのである。

Yの写図の勉強はよく続いている。家事と育児と亭主との攻防に忙殺されながら自分を牽引している姿はぼくを刺激する。恥ずかしいと思う。ぼくが未だ無限定な課題を課題化する場所に居り、そんな余裕もない所で彼女は自分を駆り立てている。気持ちが悪く、ぼくの方が苦しいのだと叫びたくなる。怠惰を言いつくろう理由なんか無いのは分かっているのに。

ぼくが如何なる世界観や理念に通じて行くかは実は大した問題ではない。（いつもぼくはそのことに色目と負い目を感じている）

今あるがままの自分の判断や表現の構造を明らかにして行くことが重要なのだ。ぼくは無意識に還元している。自他の思想性へではない。それ以前のもっと忌々しい所だ。其処にしか、ぼくの思想らしきものは育たないであろう混沌とした場所だ。にもかかわらず、其処に蓋をして、借り物の言語を積み重ね、否、其処に蓋をするために、借り物の言葉を積み重ねざるをえない。

自分が居り、他者が居り、場所がある、その原形から出発すること。

生存の具体性に最初〜最後にやって来るのは（罪）の構造ではないだろうか。生存すること自体と不可分な何事かの構造であるが故に普段意識されることはない。むしろ、意識

から遠くに追いやろうとする。しかし、〈罪〉を組織したものがいつの世も他を支配して来た。〈罪〉の組織化において決定的な力を及ぼしているのは、あらゆる救済願望と共にある優越志向だ。どのように優しげに現れようと、打ち破らなければ、ぼくが真実の場所に出られない内側の〈敵〉である。どうしてそれが〈敵〉なのか。関係を捏造し歪めて行くからだとしか今は言えない。その応え方の範囲でしか〈敵〉の構造も見えていない。

10 / 26

パチンコで千七百円もすった。今日は給料日だった。家計に割り当てないうちに幾らかばつと遣ってみたくなる。後にじめじめした悔いが残る。Yの表情は、最近いつも、のっぺりしていて変化を感じさせない。それは妙に暗い一ヶ月を予想させる。せめて給料を受け取る時くらい、かつてのような笑顔を見せてほしい。たとえ家族4人暮らすにはきつ過ぎる金額でも、ぼくのせめてもの張りというものではないか。もちろん、今日ぼくが千七百円すったということは、それとは別問題であり、自制のなかったことは素直に反省しよう。思いやりがないわけではないのに些細な身振りで大きく歪んで行ってしまう心の通路を何処に求めればいいのだろうか。今の二倍給料を持って帰れば原因が解消するだろうか。ぼく達の関係が真実ならそれはほとんど解消するかもしれない。だが、関係の真実とは。

ぼくの我ままは生得的だ。一生直せないかもしれない。家族の中でぼくは暴君であり、特権的に振舞っている。理由も無く苛立ち、当り散らす。その上、明らかに理由のあるYの不機嫌をぼくは許すことができない。Yは耐えている。いつの間にか彼女は不機嫌な素振りを見せたりすることを極度に抑圧するようになってきた。だから、ぼくへの受け答えは事務的になり、表情が死んでいってしまうのだろうか。

パチンコから帰ってみると、千円札を2枚抜いて机に置いた給料袋が、まだそのまま置き忘れられていた。彼女はお金にすぐ飛びつくことをはしたくないことだと考え、そのままにしておいたのか。二千円抜いたぼくへの抗議か。生来のんびり屋であるためか。自分の特権を嘲笑され、軽くないなされた思いがして、無性に腹立たしくなり、せりあがってくる罵倒の言葉を必死で呑み込んだ。表情は擦り切れたように、あまり変化を示さなかったけれど。

子供を寝かしつけ、後片付けを済ませて、眠りこけながら写真の勉強をやっているYを憎む理由が何処に有るといふのだ、という声を聞く。しかし、いたわりの思いを溶かすように、物悲しく暗い想念が胸に満ちて来るのをどうすることもできない。ぼくは被害者の顔つきをした加害者としてYの前に立ってはいたくない。彼女にもそうしてほしくない。

何の脈絡もないのに、ふと、ひび割れた古い腕時計をなくした時のことを思い出した。ギターと交換に友人からもらったものだった。八丈島の青年館で島の子供達に剣道の稽古をつけた日だった。とくに波紋も起こさなかった何気ない事件だったが、その時、ぼくの無言を飛び交った様々な思惑と、今日の暗さにどんな関係があるというのだろうか。

機械設計製図の通信教育をやったら次には税務会計の勉強でもやってみようと思った。父と仕事をやるには必要だ。

毎日何も蓄積できず焦ってばかりいる。酒を控え目に。

Yは今日ダウンした。

江藤淳を読んでいると、小説というジャンルに光が差してくるような気になる。反面、時折書こうと試みる自分の文章が、いかに山だしの気取り以外のものでないかを照らし出される。

昨日また鯉をもらった。今度は多少色のついた連中だ。当初数千匹もいた事務所の水槽の稚魚たちは、外にもらわれたり、淘汰されたりして数十匹まで減っていた。そこから、また、ぼくの所に放り出されたのがこの連中である。見ればドイツ鯉のような鱗をしたのや、カラス鯉に似た黒いやつもいる。しかし、皆どこか崩れた感じがあり、エラの赤さに畸形があった印象もある。体は大きく風格さえ感じさせたが、早くも3匹が死んだ。金魚と一緒にプラスチックの鉢に飼っていた当初からの鯉は一週間前に大半が死んでしまい、小さいのが2匹だけ残っていた。ポンプを備えたガラスの水槽に替えてやったら、2匹は新入りや金魚にいびられながら、進んで孤独をかこつように、今は水草の根元の砂利に口先を埋め、お互いの体をX字に交差したままじっとしている。ポンプが唸り続けるので慣れないぼくは気になって仕方ない。

よく見ると、あの小さい2匹はすでに死んでいるらしい。水の流れにあまりに従順すぎるのでおかしいと思った。水草の陰に身を預けてゆらゆらしているかと思えば、水泡に吸い寄せられ槽内を1周して砂利を這い、また葉陰に身を預けるといった動きを繰り返し始めた。何だか寂しい。一番小さくて可憐な2匹だった。引き上げる気にもならず見詰めていた。他の連中は無心に泳ぎ回っている。その間を二つの屍骸がひらひらゆらゆら舞っている。

今日は月賦の支払や多少の買物の予定もあり、4人で繁華街に出ることにした。日曜になると、出かけたいたい気持ちとおっくうな気持ちが入り混じる。Yや子供達の反応をさぐったり、けしかけたりして、実は自分を外へ押し出そうとする。

暗青色のタートルネックに黄色のカーディガン、そして、ゾウリ履きという自分の服装が気になった。Yも軽装だが配色が良くていい感じだ。子供達も貧相ではない。人々の間をさりげなく、ゆったり目配りしながら歩いた。家族はぼくのもう一つの服装になる。

デパートは便利で快適な生活の可能性を誇示している。様々な商品を陳列した欲求の区画を家族と通過しているうちに次第に心細くなってくる。八方から商品に見詰められて脳

内が淀む。

ブロードウェイを歩いて本屋に寄った。本屋も得体の知れない焦りをかきたてる。欲しいものを横目に、どうでもよいような雑誌を1冊買った。そこを出ると、Yは友人の出産祝いと子供達の衣類を少し買った。

tがむずかる。ぼくはYがとめるのを無視してゲームをやりキャラメルを1箱取った。tは立ち止まりキャラメルを口に入れる。食い終わると次を口に入れるまで歩かない。苛立つてくる。tの存在が絡みつき、自身を引き剥がすように引きずって行く。Yはyを抱いておどおどついて来る。いや、そうではなく、振り向くと自信ありげに歩いている。

ストープを買うためバスで中野坂上に回ることにして停留所に向かった。Yが「こまかいのある」と聞くので「うん」と生返事をしたが、自分の分しか頭になかった。バスがやって来てtを抱えて前に続いて乗ろうすると「わたしの分もあるんでしよう」とYが言った。ぼくの頭は白くなった。手の中には三〇円握っていただけだった。「そんな、ないよ」ぼくは口ごもって列を外れる。「いやだあ」Yはあわてて買物カゴから財布を取り出す。バスが出そうなのでYを急かして先に乗せ、次の動作を決めかねたまま最後にステップを登る。小銭入れに十円玉の姿を求めたが、足りないので五円玉を加えて六〇円にする。はつきり確認する余裕もなく料金箱に入れた。運転手は面倒くさそうに見向きもせずに進んだ。

座席に座ると周囲の目が大きく感じられ、ぼくは激しくYを憎んだ。場に不釣り合いな凄まじいばかりの憤りだった。Yにはこんな時のぼくの憤怒が不可解なのだ。何事もなかったような表情をしている。いつもそうである。いわゆる中流に近い家庭に育った彼女の精神的安定感のようなものが、ぼくの内奥の劣性を刺激するのだろうか。

ぼくの憤りはなかなか治まらなかった。バスを降り、tが道端で玩具を引き出そうとするのに苛々がますますつのる。電気屋でYに買物の相談を持ちかけられるのも拍車をかけた。彼女は、ぼくの一人相撲が通り過ぎるのを冷静に待っている。どう憤っても関係は壊れないと確信しているかのようだ。それが我慢ならない。

tは眠くなり、糸の切れた操り人形みたいになった。地面に寝転んで泣きながらぼくをうかがっている。負ぶう気分になれなかった。そうするきっかけを失っているような気がした。幼児と父親とのありふれた攻防の脇を人々が笑顔で通り過ぎる。tの泣き顔の穴ぼこのように空ろな目を見ていると、「こいつは何なんだ」と叫びたくなってくる。Yはもうぼくに近づくことができない。今、近づけば、ぼくは確実に暴発する。数人のおまわりの姿が目に入った時、「あいつらの前で投げ殺そうか」と考えている自分に脅えた。

tは「チー、チー」と言い、ズボンを下ろしてやってもチーは出ない。ごっそり抉り取られたぼくの中心に彼はひたすら入り込んで来る。彼を連れて最後まで家へたどり着くことが今日課せられた最大の任務のように感じた。しかし、ぼくは萎えるように敗北した。Yからyを取り上げ、tを彼女に押し付けると前のめりに歩き出した。yは無心にぼくと周囲を見て時々笑い、「アーアー」と言った。思わず涙を落とすところだった。



ぼくは今日で満二六歳になったらしい。人生の半分を生きたことになる。なのに自分の仕事を持っていない。何もかも確信がない。

自己放棄とはどういうことなのか。今日もモヤモヤした自分なるものにしがみ付くように生きている。そもそも自分とは何であるのか。愛の安定した境地からは遠く、家族へのやさしさを欠き、生活苦をそういうものだと一見是認しているようでありながら常に苛立ち、架空の夢のかげらに戯れ、無為のまま日々をやり過ごす。そんな無様な影の奥の奥に自分の本体が見えそうで見えない。ぼくは現に在るべく以上でも以下でもない。

十一月八日にまた公判がある。日常も闘争も連続性が命であるのに己の発想に巢食う空洞に双方とも殺がれて行く。公判を介して表現域に浮上しようとする焦りが押し寄せる。ブツブツ切断された無残な記憶に闘いは繋留されているだろうか。

また風邪が流行り出した。tがまずやられ、次にy、そしてとうとうYまで鼻を赤くして苦しそうな息をし始めた。工場ではKさんが第1号らしい。九州から持ち帰った風邪をぼくにうつされ、やっと治ったばかりだというのに気の毒なことだ。ぼくは今のところ大丈夫だ。何しろ風邪には弱いので、ニンニクたっぷりの餃子で今日も菌の浸入に備えた。

寒さを覚える季節になると生活の陰影が濃さを増す。一向に見えない明日。肉親の息遣いが切なく纏わっている。吹きさらしの生活にうなだれた貧相な若い男とその家族達、部屋のイメージが暗いまま動きを止める。食ったもののゲップが喉元に上がってくると、ますますやりきれない気持ちに追い込まれる。再び職業を自問する。それを問う前に何か肝心な自問をぼくは見失っている。

午後10時過ぎ、コタツで本を読んでいると誰かがドアをノックした。開けて見て驚いた。高校の同級生、野球部だったMが笑顔で立っていた。浅黒い肌は大人びた色合いで光っており、整えられた頭髮が年相応の感じを与える。健康そうな体軀は灰色のダブルの背広に覆われている。突然のことで声が上ずった。博多で働いていると聞いていた。そんなに打ち解けた間柄ではなかったこともあって、訪問は思いがけなかった。用事で上京したついでに別の同級生に聞いていた住所で捜し当てたらしい。名刺を置いただけで、そさくさと立ち去った。驚きが縮んでくると、彼らの足元のイメージが拡大した。それは、あの職業というもので武装した落着きに対するコンプレックスである。現在に保留を付けて生きている根無し草という自己像に由来するのだろうか。

弁護士を交えた明日の会合へは参加意志が希薄である。公判へのプランを法的に統一し

ようとするのは今かなり無理強いを感じる。むしろ、どんな政治性も個人にとって強制的な感覚を強いるものである。しかし、現在の強制的感覚には希望の影も共同性の切迫感もない。共同性を志向すればするほど逆に個人に突き戻され、荒涼とした孤立感、無力感を引きずるほかない状況にある。公判はますます法・国家のレベルに封じ込められ、まずいことに被告各人にとってそれが〈自然〉に成りつつある。検事や裁判官に有効性から迫ろうとする試みは敵に余裕を与えている。おそらく弁護士は我々のそういう状態を更に促進するだろう。

法は〈行為〉の個別性と集団性をあいまいに分離・接合しながら一つの罪状を創り上げる。この分離・接合を媒介するのは何であり、いかなる言語思想に裏打ちされているのか未だ明確ではない。裁きのプロセスにおいて、〈行為〉は個別性と集団性の両極へ向かって〈不可分〉に切り裂かれているという矛盾に遭遇している。この矛盾は〈行為〉の反社会性を断罪する法の手つきをはみ出す。ここを見極めて行く方向にしか闘いも見えて来ない。

ぼくには世界観が無い、言わばこの鯉の稚魚たちのように健康だ。

11/14

昨日、東京駅八重洲口の西村弁護士の事務所まで8日の公判準備を話し合った。検事側の証拠資料の内、被告人供述調書など必要と思われるものをUおよびY M君と弁護士が抜粋してコピーを用意していた。何部か抜けているとの註も述べられた。8日は全体状況の実況見聞調書作成者2名、U K君関連の証人2名が出てくる予定になっている。証人に対する対応の結論として、「写真にU K君の姿はなく、証人の作成した資料に彼の行動を証拠付けるものは見出せない」ことを指摘し、全面撤回を要求するということになる。出席者7名でそのことを確認した。

中核派のU君から証人尋問の前に一言公判廷で発言したいことがあるとの提案が出た。この提案についてY M君から異議が出て紛糾した。U君の発言要求の趣旨は「事件の構成と件を明確にし、加害者・被害者・犯罪内容を明確にするところから始めるべきなのに、そこが漠然としたまま全体状況などという点で証拠調べの初めに持って来られている。このことはブル法理念に照らしてもおかしいし、司法権力の矛盾を曝け出している」ということであった。Y M君は「言ってみるだけなら消耗だから止めたほうがいい」という意見である。U君はどうしてもそのことを言いたいらしい。

「一こと言ってやる」というのは、内容・結果に関わらず別にいいのではないかと思っただ。言うことで公判の不可避な形に影響を与えることはできないだろうし、すきま風のような揺らめきさえ生じないかもしれない。しかし、それでも心の波紋はある。それを捉えるかどうかは一人一人の現在が決める。法廷でやることの核が決まっているなら、それではないかと思はしい、そして、そういうことになった。

Mさんが解説的に語った法廷の構造からぼくは少なからず示唆を受けた。「各証人が呼び出される。皆、それぞれ自分の見たこと・聞いたこと・やったことを断片的に語るだけだ。事件の性質や全体の構造については分からないと言い、意見は述べない。述べても無視される。そのように集められた断片がどのようにして全体の状況に統一されるのか。さらにその全体の状況と各被告人の個性がどこでどのように結び着けられ個人の違法行為は罪として構成されるか。この法廷の構造は寸部も見逃してはならない」と彼は言った。そうなのだ。これを自分の目で確かめないと公判闘争は端緒を殺される。

この会合で感じたことは、四・二八沖縄闘争の正当性は政治闘争の核ではあってもそのまま公判闘争の核にはできないということであった。つまり我々は告訴されることによつて、街頭闘争から公判闘争へと平面を移動したのではない。構造的に移動したのである。別次元の闘争として貫徹したとき、初めて端緒の政治闘争と「統一」しうる。それは一言で言うなら「法・国家の幻想性を包囲し尽くすべき表現に向けた闘争」だ。激烈な目眩が襲う。立っていられるか。この闘争には休息が許されない。日常を含みかつ超えるところに創出される「闘争」である。軽はずみに表現してよいのだろうか。この表現の根柢にぼくは責任を取りうるだろうか。

今日、久しぶりにK君兄弟に会った。兄のYさんは元氣そうだった。K君は少し痩せたように見えた。「分離」した公判のかたはついたらしい。保釈金のことと昔の友人達と話したいと言っていた。詳しく聞く気にはなれなかった。彼をはじめN君やS君などみんな良く作品を仕上げている。その根気の良さや情熱には脱帽せざるをえない。それぞれうまくなっている。特にK君は「分離」後、憑き物が落ちたように自分の作品になっている。寂しさも羨ましさも膨らみそうになるが、ぼくは自分の課題を地道に歩むしかない。硬い不毛の大地を踏む華奢な心が折れないかぎり。

「～」第2号を今月中に出そうとYM君と話した。

11 / 5

K君夫妻が訪ねてきた。Sさんは相変わらず青白い顔色をしていたが、以前会った時に比べて大らかさうに見えた。やはり亭主のあからさまな制約がとれて自分の身近に戻ってきたということかもしれない。夫婦二人きりの自由な感じがまぶしい気がした。彼らに必要なのは生活への意欲だけだと思われた。

彼らが帰っていった後、ぼくもYも無為のまま濃密な時間をもがいていた。ぼくは、自分の苦悩の大部分は対世間的な優越意識を裏目に持つ劣性意識によるのだと思った。そして、究極、我ままな夫であり、怒りっぽい父であり、甘ったれた息子であり、頼りない友人であり、といった有りのままの姿に自分の本体があるのだと思った。そう思うと、後は何事かを為す意志のみが必要であるだけだと思われた。だが、Yから心情も何もかも一緒くたにした裁判に関する質問がやってくると、それに答えようとする自分がまたもや得休

の知れぬ形態に分離して行くように感じられた。ぼくの苛々は激発して、の泣き声は部屋を震わし、それぞれの思惑は色あせた畳の上に落ち、とまどい、部屋は寒々としている。ぼくは一升瓶の底に残っていた日本酒を辛い野沢菜をつまみに一人飲んだ。

11／28

やっとへへ第2号を出した。不勉強がたたり課題の整理がつかないため、メモから拾っただけの言葉があいまいに歪んでいる。しかし、自分自身にはね返って来るものは大きい。それを捉えうるかどうか今後が問われるだろう。

隣家の老女が風邪をこじらせ病院に担ぎ込まれてから周囲は急にあわただしくなった。彼女はここの社長夫人の母親であり、Yの母にとっては叔母に当たる。肉親らは死を予想して神妙な顔つきでいそいそ動き回っている。果てには家の中の整理を始めた。ぼく達従業員は指示に従って動きながらどう接してよいか分からないもどかしさの中にいた。職場や家庭にはいつものように小さい諍いや笑いがやって来るけれども、ふと気が付くと、死の色を宿した他人の不幸に間近で見詰められており、宙に浮いた手ごたえのない同情心をもてあました。死ぬかもしれないからせひ会っておきたいと、親戚と称する人々が見舞いに訪れる。このような形で迫ってくる人の死は実感を拒絶している。そんな死の周囲では人々の表情は白んでいるものらしい。白けているのとは違う。確かな感情を引き寄せようとしてはいるが、初めから抵抗を放棄している表情とでも言えようか。老女が十分に老いているからか、周囲はどうしても助けたいという切実さから遠いように見えた。そう思うのは、ぼくの距離感かもしれない。

昨日、Yの母から電話があった。「お見舞いをあげたらどうか」とのアドバイスだった。

「おせっかいめ」とぼくは思った。Yの親類への遺恨が轟然と頭をもたげる。「ぎりぎりの賃金で働いている従業員が経営者側に見舞いなど出す必要はない」という意味のことを口走った。酔ってもおり、生意気な強い口調になったと思う。義母は「現代風の考えは分からないけれど、上のKさんと話し合っとうまくやって下さい」と切なそうに言った。ぼくはザクツと何か裂けたような気がした。そして、悲しかった。抽象性さえ動員して殺到する己の感情の断層にはまり込む。百万言を費やしても理解し合うことのない生の側の修羅に比して、死はそのものの内に「答え」を含んでいるのではないか。

「発してしまった言葉はもう取り返しがつかない」

11／29

給与の昇給分を退職金の引当として積み立てて行くという社長の案が7月頃から実施されてきた。今日、再びその件について三菱銀行の営業員を交えて話しがあった。この引当の金額を、雇用者財産促進制度とかいう利子非課税の定期預金として月々預け入れてはどうかという銀行側の勧誘である。社長は当然乗り気で、利用することに決まる。しかし、

考えてみれば、そもそも退職金を給与から差引いて貯めて置くということがおかしい。ぼくもKさんも非常に不満であり、白け切った気分だったが、面と向かつては文句を言えなかった。従業員4〜5名の小規模な企業では、退職金の支払は事業主の気分次第という所が大半だ。社内預金のつもりでいれば何てことはないと言いついて聞かせた。消耗戦に持ち込むほどの問題とも思えなかったし、労働環境にこだわるほど今の職場への執着もなかった。この心理的な動き自体が屈辱的なことだ。こんな状態で何年か耐えようとするれば気持ちはますます荒んで行く。

他の人の話しを聞くと、生命保険や積立預金など皆かなり入っているようだ。ぼく達には保険はおろか預金さえ全くない。本当にその月々を生活している。無謀極まりないことだろう。ぼくが倒れたら終わりだ。

「しかし」とぼくは思う。「ぼく達が一日で潰れる生活を、あなた方が僅かなゆとりで一年持ちこたえたとして、それほど大きな違いだとは思えない。今日1日を確かに生きえたことだけがぼく達の生の意味である」と。この理屈が妻子の存在の重さに拮抗しえないのは事実だ。ただ、このぼくと、ぼくの家族の生活には誰からも触れられたくない。Yはこういうぼくに主導される生活をどう受け止めているのだろうか。彼女を耐えさせているのは、執着か、内向する意地か、底の抜けた楽天性か、その全てか。

ぼくは人間的な感情の潤いが自分の内部に見出せない。ガサガサ干からびた感触がある。そんなぼくにYM君からハガキが来た。Aさんにまた会えそうだ。Aさんは今までに出会ったことのない女性を感じさせる。研ぎ澄まされた知性と危なっかしさが高所で微妙なバランスを取っている。会っていると不安な快感がひらめく。石の地蔵さんじゃあるまいし、ぼくにだってそんな感情があつて当然だ。

12/5

友人達の書いた作品を読み返した。暗澹たる思いにとらわれる。文章力も構成力もしっかりってきている。特にK君やN君は「うまくなったなあ」と思った。思いながら気分が滅入った。これは何だろう。焦燥もしくは嫉妬。

12/6

表現が、思いつきやポーズを超えて個性と共同性の捩れを貫通するために、ぼくはどう変わらねばならないのだろうか。立ち止まってくよくよしている間に、人々はズンズン先へ進んでしまう。

12/10

先週日曜（3日）もKさん達と入間川に釣りに行き、YM君の所で世話になったのに、今日もまた同じ場所に先週のメンバーで現れ、彼達親子をあきれさせた。KさんやNさんは釣りきちに違いないが、ぼくも近頃その傾向がある。ついに3人とも彼の家に上がり込

んでご馳走になってしまった。

帰り際、松下昇さんの私信をY M君に見せられて驚いた。彼が松下さんにへ〜1・2号を送っていたことは全く知らなかった。手紙は便箋1枚の短文だったけれど、ぼくは怖いものでも見るように1度目を通しただけで2度読み返す余裕がなかった。だから、松下さんの子供さん達の名前を今思い出すことができない。

ぼくは松下さんのことをよく知らない。Y M君を通じて表現に触れ、その思想と行動に目を開かされつつあるのだが、氏の闘いの意味と凄絶さは、時代を抜きん出ていることが予感され、ぼくなど息苦しくて、彼の前に立っていることは到底できないだろうと思っ

ている。その人がぼくの稚拙な文章を目にした、「……さんにもよろしく。わたしにも二人の子供がおります。兄がへ〜、妹がへ〜といえます。」といった文面が頭の心にこびりついて離れない。羞恥をせわしなく追いついて行くものがある。文面通り穏やかに読もうと思っても、彼がぼくの文章を目にしている時の表情を読もうとしている。顔も何も知らないのに。

個人崇拜や偶像化に向かう心性を、同じ人間としての共感の方へ突き破って行くのはたやすいことではない。主観的に意図するだけでは駄目だ。練磨と主体的運動の持続、その一点にかかっている。

12 / 15

AさんやY M君と新宿で飲んだ時のことだ。

Aさんとは3回目だったが、彼女は、どこか意識的に自分を亡霊に擬している印象があり、根の深い所で実存主義にかぶれているのかもしれないと思っただ。そんな規定の仕方をしたらお互い身も蓋も無い。彼女から見たら、ぼくなどさしずめ生真面目さを装った浅はかな半馬鹿ということになるだろう。頭の回転の良い人たちと話していると、酒を飲んでいても緊張して疲れ切ってしまう。いつものように苦さが残る。今回は特にY M君と彼女の男女レベルの感情がもつれているらしく、ぼくを入れた3人の空間は歪みっぱなしだった。位置の取りように苦慮する中、彼女はへ〜第2号のぼくの文章から「負い目」という言葉を取り上げ、「このように規定して、だからどうだ、と持って来れば、辻褄合わせの物語みたいだ」と厳しく批評した。彼女の思惑とは少しずれたところでぼくはその批評を受け取った。

「負い目と感じてしまうことは、より深い関係の視点から見た真の負い目の影に過ぎないということ。倫理的な構成がまずいと言うより、卑小な倫理性故にまずいのだ。倫理が深く沈んでいない。軽率さが安易に倫理的言語を呼び寄せている。」

そう聞き替えた後に反撃のつもりだったのか、まさしく軽率にAさんの人物評をやり、「ぼくの抽象化によるAさん像ですが」と付け加えたら、「当然そんなもんでしかないわよ」と一喝を食らった。その表情の思いがけない陰しさに心底怯んでしまい、次に何をし

やべったらよいか途方に暮れた。自由奔放そうな彼女の内奥に一瞬触れた気がして、普段より無口なYM君の表情をそれとなく窺っていた。

12/19

ポーナスが6万近く出たので、K君やTさんに借金を返済できる。しかし、それを返してしまうと手元にはほとんど残らない。わびしいが、さっぱりする方が先だ。

ポーナスの出る数日前、とうとう社長と言い争いをやってしまった。昇給分を退職金の引当に積んで置くという件である。Kさんとその事を話しているうち、一言社長に言わねばならないという気になった。「性質上、退職金引当と言うのはおかしい。定期積金より自分は月々もらった方が助かる。この二点からぼくはこの預金をしないことにする」と直接言いに行った。案の定社長は怒り出し、「おやごころ」とか「温情」とか言った後、「社の方針に従わないのだな」と言い、ぼくが「これは強制ではないと言われていたが、社の方針として出されているのか」と聞くと、「あたりまえだ、俺の言うことはすなわち社の方針だ」と言った。それだけだ。

気まずい沈黙や陰口を間にはさみ、首を切られることを覚悟したが、Kさんが間に入って苦々しい思いでぼくは妥協した。事実だけ見ると、この妥協に実害はなく、つまり預金をやってもらえるのだが、前近代的温情主義の欺瞞に屈したことになる。その後、社長は「退職金の引当」という言葉を遣わなくなった。

とんだ茶番を演じたけれども、多くの問題が付着しているように思えた。市民社会が引きずる旧社会関係の個別的矛盾という位相を超えて、違う言葉で包括したい衝動を覚えている。

12/20

表現時点で世界に自己意識を屹立させているか。公表時点を再表現に組織できているか。

12/21

金魚を1匹捨てた。

マツカサ病というやつらしい。腹が膨れ、鱗が松かさのように毛羽立って気色が悪い。おかげで今日一日背筋に悪寒がし、皮膚のあちこちに痒みを覚えた。ああいうものに対する多くの反応は異常なほどしつこい。魚類を無頓着に飼っていた虚を突かれたが、本来、全ての存在に隠された「忌まわしさ」の露出の一例であり、これを「忌まわしさ」と感じる生理自体の「忌まわしさ」でもある。

ぼくら夫婦を永劫的無力感が包んでいる。牡丹雪のようにゆっくり降って来ては融けてしまう不確かな信号をぼんやり眺めている。(闘争)という言葉のもっとも不似合いな場所に(闘争)の幻影が一瞬よぎり、次の瞬間には視線を拒絶している。

悪寒が続く。yの泣き声、身勝手な(存在)の忌々しさ、(未)意識の持つ暴力的な嫌

らしき、肉体に囲まれ、肉体を盾にして出会うのが嫌だ。不快が突き上げる。矢も盾もたまらない。悪寒がする。背中を痒みが動き回る。存在にこびり付いた不浄感、何もかも根底から洗い流したい。鳥尾の「夢の中の日常」への共感、比喻としてでなく裏返る存在。

外側に働き、内側を名状しがたい形に強いる規範領域。法の位置は何処か。自然性という膨大な規範に蹂躪される意識、を意識している〈意識〉は幾重にも不可解な自然性に白っぽく腐って行く。肉体は凍え、びくびくと細胞分裂の音がして全世界がその度に歪む。在らぬ己と世界を造形しようとして存在の弾けた者たちの残骸にも、確実に鱗状の無数の血痕が浮き出ている。

うわーおうー

12 / 22

学力が無いとか、四流どころの大学を名前だけ通過させて来たとかいった卑小な劣等感でさえ、この世界と持続的に抗っていくことを通してしか解消することはできない。

〈分離〉したK君との先程の電話の嫌らしさ。

「Y M君も一緒に行くと思うけど、いいかい」

「ほんと、いいよお」

「二人ともクダクダ理屈はこねんから」

ぼくのこういった無意識の思いがりは、あの惨めったらしい劣等感と表裏をなしている。こういうことを記録してしまうことを、自虐を装った弁明に転化することなく、常に〈なにものか〉に向けての垂鉛として深く沈めていかなければならない。

「重要なのは次のことである。社会のあらゆる階層が相互に加え合う息づまる圧迫、あまねく見られる無気力な不調和、自分を見誤るかと思うと、それに劣らずうぬぼれたりする偏狭さ、これら、すべてが、一政治体制―惨めなもの一切を温存することによって存続し、それ自身、政治の惨めさに、ほかならない一政治体制―の枠にはめ込まれている。こうした有様を描写することが重要なのだ。」（ヘーゲル法哲学批判―高島善哉・光郎訳）

Y M君が、この間、ぼくの遣う「政治」という語が分からないと言っていた。確かにぼくは「政治領域と生活領域の問題を明確に区別して扱わねばならない」といった言い方をする。あいまいで受け売りのなしゃべりだったかもしれない。この区別をマルクスの言に対応させると「利己的な独立した個人と、抽象的な公民への人間の必然的分裂」ということであり、この分裂を踏まえて、双方向に掘り進んで行くことによる内在的な統一ということと言いたかったのだ。Y M君は「政治を含む全幻想領域に屹立しうる表現、自分にとって最も切実かつ不可避な課題の自立的な追求」という視点から、ぼくのある種の図式性を指摘したかったのかもしれない。もう一度よく話してみたい。



昨夜は、Kさんとパチンコに行き持ち金全部すったあげく、Nさんの家上がり込んで花札とマージャンで夜を明かしてしまった。家に帰ったのは今朝9時過ぎ、さすがにYの表情は険しかった。ぼくは布団をひっかぶり、子供たちが遊びに誘うのを無視して眠ろうとしたがなかなか眠りに入れなかった。

夕方から再びNさんの所に行った。今度は家族ごと集まってささやかなクリスマスパーティーをやった。ぼく達は手ぶらで行き、ケーキとシャンパンをご馳走になった。マアちゃんとは迷コンビぶりを発揮して、男の子どうし乱暴にはしゃいでいた。yはあまり人見知りしなくなった。ずいぶん大人しい。

Nさんは昨年奥さんを亡くし、息子を山形県尾花沢の実家に預けており、今日は特に寂しそうに見えた。3年前の自分達のこととも思い出されて、Yにもう少しやさしくしなければならぬと思った。

どんな思想的論理にも個人倫理の類化という要素が含まれているのではないだろうか。様々な先達の心に底流している〈罪〉の意識は、この類化のプロセスの構造に原因があるように思われる。ただ、それぞれの不可避性に共感以上の正当化を付加してしまうと、新たな宗教に転じて行くだろう。〈罪〉の贖いや解消といった処理方向に人智を超えた何かを呼び寄せるのではなく、正しく究極的な罪概念の死滅を差し示そうとしない思想は信じる気になれない。

何一つ創造できない脳髓。思考の通路が必要だ。読書が圧倒的に足りない。憧れはあっても、元々ぼくは知的な作業が好きではないし、向いていないのだ。読むまいと思えば死ぬまで何も読まずに過ごせるだろう。日々の慰みがあれば、気だるい安楽の中にいつまでも身を沈めていられるだろう。それを許さないのは打ち勝ち難い「優越に向かう心理」のようなものだ。怠惰という器にも巢食うそいつが、必要以上にぼくを揺さぶっている。これこそ闘わねばならない、見えない〈敵〉の影である。

ところで、法に象徴される可視化された〈規範〉は、膨大な〈規範〉領域からの構造的抽出であり、抽出結果の固定化である。抽出方法及び固定化の史的必然性は、貨幣を生み出した力↓人間の本質力に重なる人間存在と不可分な〈自然〉と言えるだろう。

しかし、〈自然〉の産み出す矛盾を根底的に止揚する主体が〈自然〉領域に属しているというのは〈不自然〉である。自覚的〈闘争〉の不可能性に人類を遠くまで幽閉している矛盾の根源が露出してくる。つまり、ぼく達は人間存在そのものへの闘いを内包しないかぎり、変革対象としての〈自然〉領域の〈外〉に幻想的位置を占めることはできない。

…誰もが知っている或る観光地に居る。ぼくは何らかの用事で、その三つ位先の土地へ行き着きたかったのだ。そこへ行くにはその観光地で一行のバスに確実に乗らねばならない。しかし、いくら捜してもバス停が見当たらない。人に聞いたり、あたりを付けたりと、糸が纏れたように端緒をなくしてしまう。どちらの方角にその土地が位置しているのかさえ分からなくなり、かすかな記憶を必死に手繰り寄せ、繋ぎ合わせ、一つの明快な方向を出そうと焦ってばかりいる。(風景の不明な回転)

一人の男が確からしい回答を告げた。「―門の左斜め前が―」その方面へのバス停だと言うのだ。長い幾重もの階段を降りて、ぼくはその確からしいバス停に向かった。だが、それもますます怪しくなってくる。…

夢の記憶をまさぐっていると、忘却に白む意識の漠然とした感触を通して、定かならぬおびただしい残像が結びそうに結ばず、まして言葉の網ではすくうことができない。向こう側にぼくが持ち込んだ、未解決な、「バス停」に象徴されるテーマとはいったい何だったのだろうか。

年の瀬は押し迫り、気分を世間の方へ流そうとして働くものがある。

永里繁行